

Only connect

浅田 雅明

フォスター (E.M.Forster) が作家としての名声を確立した *Howards End* は 1910年10月に出版されたが、1905年の最初の小説 *Where Angels Fear to Tread* 以来6年間に発表された4つの小説の最後の作品である。半世紀以上にも及んだヴィクトリア女王の長い治世のあと、二十世紀とともに始まったエドワード2世の時代はこの作品が出版される数ヶ月前に短い治世を終えているのだが、この時代のイギリスは政治的にも社会的にも様々な問題を抱えており、ヨーロッパを荒廃させた第一次大戦へと突き進んでいく激動の時代でもあった。

この作品は *Daily Telegraph* の ‘There is no doubt about it whatever, Mr E.M. Forster is one of the great novelists.’ という書評にみられるように当初から多くの賞賛を得ることとなったのだが、その後の、二十世紀を代表する二人の批評家リーヴィス (F.R.Leavis) の ‘it exhibits crudity of a kind to shock and distress the reader as Mr Forster hasn’t shocked or distressed him before’ と、トリリング (Lionel Trilling) の ‘undoubtedly Forster’s masterpiece’ という対照的な批評はあるものの、この作品が優れた野心的な小説であるという評価に変わりはない。

「ただ結び合わせよ」 (“Only connect...”) というエピグラフで始まるこの作品は、当時のイギリスを代表する上層中産階級に属し、精神的で内的生活を重視するシュルーゲル家 (the Schlegels) と、実利的で外的生活を重視するウイルクックス家 (the Wilcoxes) が試練を経たのち伝統的なイギリス田園生活を象徴する屋敷ハワーズ・エンドに於いて融和し、下層中産階級に属するレナード・バスト (Leonard Bast) とシュルーゲル家のヘレン (Helen) と

の子供がハワーズ・エンド邸を引き継ぐという結末の物語で、トリリングの指摘する、「誰がイギリスを引き継ぐのか？」(Who shall inherit England?) という問いに一応の方向性を示したものである。

作品はヘレンの手紙で始まり、最後もヘレンの次の言葉で終わっている。

Helen rushed into the groom, holding Tom by one hand and carrying her baby on the other. There were shouts of infectious joy.

“The field’s cut!” Helen cried excitedly — “the big meadow! We’ve seen to the very end, and it’ll be such a crop of hay as never!”²

干し草畑で遊ぶヘレンの子供の姿と、大豊作のうちに収穫が終わり、広々と見渡せる田園風景は未来への希望を抱かせるようだが、一方では大都会ロンドンの赤煉瓦色の新興住宅が不気味な兆候を見せながらハワーズ・エンドに忍び寄っており、この最後の場面は作品が孕む問題が解決した幸せな光景であるとは言い難い³。このような結末は作品の評価を覆すものではないが作品の弱点であると指摘されてきた⁴。B. Rosecrance は次のように指摘する。

Critics additionally have expressed dissatisfaction with the novel’s resolution because, despite the plot’s assertion of connection accomplished, the ending seems rather a victory for the Schlegels than a reconciliation between values.⁵

“Only connect”が示唆するようにシュルーゲル的世界、ウイルコックス的世界という相反する価値観が融合する結末が予測されるのに、フォスターの意図とは異なる展開になっているという弱点が指摘されているのである。しかしこうした結末の「不安定さ」は果たして作品の弱点であるのか、またその「不安定さ」は作家としてのフォスターの姿勢とどのような関連があるのか、小論ではマーガレット (Margaret) とヘンリー (Henry)、ヘレンとバストの二組の結びつき (connection) を通して考察するものである。

シュルーゲル家の姉妹マーガレットとヘレン、そして弟のティビー

(Tibby) はロンドンのウィッカムプレイス (Wickham Place) のフラットで暮らしているが、「骨の髄までイギリス人」(English to the backbone) という訳ではない。彼らの父親は「ヘーゲルやカントの同国人」で、祖国ドイツの物質万能主義を嫌いイギリスに帰化した理想主義者で、裕福なイギリス女性と結婚をした人物であった。両親のあとを継いだマーガレット達には確固たる経済基盤があるので生活の心配をする必要もなく、個人と個人の人間関係や「目に見えないもの」、精神世界を重視し、音楽会や討論会に出かけ、教養ある内的生活、ブルームズベリー的生活を享受している。ウイルコックス家の当主ヘンリーは実業家で、大英帝国の繁栄を支える物質主義、商業主義、そして「電報と怒り」(telegrams and anger) の外的生活を代表する人物で、シュルーゲル家とともにイギリス社会の中核をなす上層中産階級に属している。だが、ウイルコックス家の人々はウイルコックス夫人ルース (Ruth) を除いてはシュルーゲル家とは対照的で、精神的なもの、個人的なものの意義を認めようとはしない。作品の縦軸であるハワーズ・エンド邸の認識に関して明確に示されているのだが、ウイルコックス家の人々は建物の精神的な意義を認めることができない。彼らにとってハワーズ・エンドは資産としていくつか所有している家のうちのひとつにしかすぎないのである。half-Germanのシュルーゲル家の人々が自己のアイデンティティーを求めて落ち着く家を探そうと苦心するのに対して、イギリスを牽引する階層で生粋のイギリス人であるウイルコックス家の人々は根無し草のように家から家へと慌しく放浪し、ハワーズ・エンド邸が象徴するイギリスという国の伝統に興味を持つことはない。そしてこうした状況はまさに当時のイギリス社会を反映していると言える。

マーガレットとヘンリーとの結びつきはヘレンとウイルコックス家との係わり合いに始まる。ハワーズ・エンドに滞在中のヘレンはウイルコックス家の次男ポール (Paul) と恋愛騒ぎを引き起こすのだが、ポールに惹かれたのではなく、シュルーゲル家とは全く異質で男性的なウイルコックス的世界に憧れたからである。一人の人間にではなくひとつの家族に恋をしたのだが、ヘレンはすぐにウイルコックス的世界の実体は「恐怖と空虚」(panic and emptiness) であると認知し、それ以降はウイルコックス的世界を嫌悪するこ

ととなる。ヘーゲル・カント的ドイツ理想主義の影響を強く受けたシュルレーゲル姉妹が尊重する内的世界の他にも外に大きな世界，人生が存在することを認識する点では一致しているのだが，「外の世界」に対する態度はマーガレットとヘレンでは立場を異にする。

The truth is that there is a great outer life that you and I have never touched—a life in which telegrams and anger count. Personal relations, that we think supreme, are not supreme there. There love means marriage settlements, death, death duties. So far I'm clear. But here my difficulty. This outer life, though obviously horrid, often seems the real one—there's grit in it. It does breed character. Do personal relations lead to sloppiness in the end? (p. 25)

(下線部筆者)

マーガレットはヘレンほどの魅力はないものの知的で，自分の考えを的確に表現できる現実的な人物であるが，「電報と怒り」が重要で，人間関係が最高のものではない「外の世界」の存在を肯定する。10年以上も家事を担当して妹と弟を育て上げてきたマーガレットであるから，厳しい現実認識力と着実な経済的観念が備わっている。

You and I and the Wilcoxes stand upon money as upon islands. It is so firm beneath our feet that we forget its very existence. It's only when we see someone near us tottering that we realize all that an independent income means. Last night, when we were talking up here round the fire, I began to think that the very soul of the world is economic, and that the lowest abyss is not the absence of love, but the absence of coin. (p. 57)

「この世のどん底は愛の不在ではなく，お金の不在なのだ」と語るマーガレットは，経済的な基盤が自分たちの生活に重要であることをも認めている。「他人を信用するというのは金持ちだけに与えられる贅沢な楽しみなので，貧乏人にはそんな余裕はない」とするならば，マーガレットが重視する人間

関係にとっても経済的なものが果たす役割は否定できないものである。マーガレットには現代の文明、経済的繁栄を支えているのがウイルクソックスの人々の働きによるものであることがわかっている。従ってウイルクソックス家の資本主義的生活に理解を示し、「内的生活」や個々の人間関係を重視するとともに、「内的生活」を支える「外的生活」の意義も積極的に認めようとするマーガレットの精神は、ヘンリーとの結婚という形に辿りつくこととなる。

Only connect! That was the whole of her sermon. Only connect the prose and the passion, and both will be exalted, and human love will be seen at its height. Live in fragments no longer. Only connect, and the beast and the monk, robbed of the isolation that is life to either, will die. (pp.183-184)

(下線部は筆者)

マーガレットがヘンリーとの結婚を決意するのは唐突で現実性を欠くという点は指摘される場所であるが⁶⁾、マーガレットの真意はシュルレーゲル的世界とウイルクソックス的世界を結び合わせる「虹の掛け橋をつくること」(the building of the rainbow bridge)なのである。「散文と情熱をただ結び合わせよ」とは一方では精神主義と物質主義との結びつきを意味しているのだが、結婚は主義を統合する為のみに行われるものではなく、個々の人間としての結びつきが重要であることは言うまでもない。だが、ひとりの人間としてのヘンリーは精神的、個人的なものの意義を認めず、真の人間関係を構築することができない。「目に見えぬものが目に見えるものに対して主張する訴え」など全く理解できない、「恐怖と空虚」しか存在しない人物である。間違った忠告をした為、結果的にバストを失業に追いやっても自責の念は全くない。さらにヘレンとバストの不道德な関係を責めながらも、自らが過去に犯した同種の行為を悔いることもない。こうしたヘンリーの人間性にかかわる多くの欠点を熟知しながらも、それでもマーガレットは結婚の意志を変えることはない。先に指摘したとおり、この様なマーガレットの決心には説得力に欠ける点が多いのだが、それでも二つの世界を結び付けようとする強

い意志が働いていることは否定できない。この点が先行する三つの小説とおおいに異なるところでもある。

しかし意識的に結びつこうとするマーガレットの努力が十分に達成されているのかとなれば、そうも言えない。強い意志と希望は捨てないものの、ヘンリーとの異なる資質を結びつけようとするたびに、マーガレットは自らの試みが困難なものであり失敗に終わっていることを認めているし、「愛と真実—この二つの戦いは永遠に続くものらしい」と、愛と現実は一致しないことも認識している。そしてバストの子供を妊娠したヘレンを一晩だけハワーズ・エンドに泊めて欲しいという願いを、ヘンリーが世間体を気にして頑強に拒絶するに及んで、ヘンリーとの生活に我慢ができなくなり、彼の許を去りヘレンとドイツに行く決心をする。

It was spoken not only to her husband, but to thousands of men like him— a protest against the inner darkness in high places that comes with a commercial age. Though he would build up his life without hers, she could not apologize. He had refused to connect, on the clearest issue that can be laid before a man, and their love must take the consequences. (p. 332)

別離を決意するこの場面もまた突然で不可解なものであるのだが、少なくともマーガレットがヘンリーを変えることができなかったこと、二つの世界に虹の掛け橋を築くことができなかったということを意味している。血縁は強いものであるからマーガレットがヘレンとの絆をヘンリーより強く感じるのは当然だとしても、それでもマーガレットとヘンリーの結びつきはいかに‘weak’で‘loose’なものであるかという事実は否定できないものである。結末ではマーガレットとヘンリーはともにハワーズ・エンドで暮らしているのだが、その理由は、ウイルコックス家で最も実利主義で俗物である長男チャールズ (Charles) がバストに対する過失致死罪で懲役刑を科せられ、「要塞が崩れ落ちた」ヘンリーが助けを求めてきた為である。マーガレットはヘンリーの長所であった活力を奪い去っただけで、ヘンリーの信念を変えさせることができた訳ではなく、意図的に結びつこうとした試みが成功したとは言い難

い。

ヘレンはバストの子供を生むことになるのだが、ヘレンとバストの結びつきも決して強いものではない。バストは中産階級の下層部に辛うじて留まっている人物で、経済的に困窮しており、教養を身につけることで少しでも上層部に這い上がることを切望してラスキンを読み、クラシックの音楽会に出かけたりするのである。バストが属する階層の描き方に関しては「この物語はひどい貧乏人には用がない」と6章で語られているし、「もしフォスターがディケンズであればレナード・バストは説得力を持った人物となり *Howards End* はもっと満足のいく作品になった」と J.S.Martin も指摘するように十分なものではないのだが⁷、それでもバストはこれまでの作品には登場しなかった層の人物であり、バストの存在は作品に社会的な広がりを与えることとなっている。

ヘレンがバストと知り合うのはコンサート会場からヘレンが間違っバストの傘を持ち帰ったことが契機となる。「人間同士の関係こそ本物の人生なのよ、いつまでも永遠に」と個々の関係を重視するヘレンだが、バストに対しては異性への愛情ではなくて、共感、同情、憐れみといった種類のものである。そして説得力を欠くものとしてしばしば批判されているように⁸、ヘレンとバストの性的な関係は確かに不自然なものである。ヘレンはマーガレットと比べればバストに対してより好意的であり、また衝動的な性格でもあるのだが、しかし、バストとの繋がりには彼を破滅させたことに対する償いの意味合いが強い。バストの勤務先の保険会社は倒産の危険があるので早く辞めて別の会社に移るべきだというヘンリーの忠告をバストに伝え、これを信用してバストは別の会社に入るのだが、辞めた元の会社は倒産を免れ、逆に新しく入った会社から人員整理の為に解雇されてしまう。失職し貧困のどん底に落とされたのはヘンリーのせいだと憤るヘレンは、ヘンリーの娘イーヴィー (Evie) の結婚式が行われている日にウエールズのオニトン (Oniton) の屋敷まで強引にバスト夫妻を連れ出し抗議に行く。ヘンリーにバストの仕事の世話をしてもらおうという訳なのだが、ヘレンの意図に反し、バストの妻ジャッキー (Jacky) は10年前まだウイルコックス夫人が生きていた頃へ

ンリーの情婦であったことが露見し、仕事の世話もしてもらえず追い払われる。この時点でウイルコックス家に対するヘレンの怒りは頂点に達するのである。その結果としてヘレンは衝動的に、極めて強い正義感から、哀れな犠牲者バストを「おそらく30分ほどだったろうが、徹底的に愛した」(she loved him absolutely, perhaps for half an hour) のであって、人間同士の深い絆で結ばれた訳ではない。ヘレンは翌朝早くホテルから姿を消し、置き去りにされた一文無しのバスト夫妻をさらに困難な状況にしてしまうのだし、バストに5000ポンドの大金を補償として与えるようにとティビーに指示をしたあと、ドイツに旅立ってしまう。そして妊娠の事実も最後までバストに知らせることはないのである。

Helen forgot people. They were husks that had enclosed her emotion. She could pity, or sacrifice herself, or have instincts, but had ever loved in the noblest way, where man and woman, having lost themselves in sex, desire to lose sex itself in comradeship?...I want never to see him again, though it sounds appalling. I wanted to give him money and feel finished. (pp.311-312)

マーガレットはヘンリーをいかに軽蔑しようと、相手の男の面影が残っているが、ヘレンは人間を忘れてしまう。バストとの関係も、「二度と彼に会いたくはない。お金を与えてけりをつけてしまいたかった」と自らが認めている程度の結びつきでしかないのである。

‘Only connect’のスローガンが基盤のこの作品では〈マーガレット：ヘンリー〉〈ヘレン：バスト〉の二組の人間の結びつきが中心となって展開しているのだが、このように二組の関係ともその結びつきは極めて弱いものである。ヘンリーとの結婚を経て結果的にはルースの遺言どおりハワーズ・エンドの相続人となるマーガレットにしても、夫はいるが子供を愛することはできないし、ヘレンには子供はいても夫はいないのである。‘Only connect’とは対立する世界の融合、即ち内的世界と外的世界、男性と女性、さらに個々の人間の内の‘beast side’と‘monk side’をも結び合わせることを意味しているの

だが、マーガレット、ヘレンの両者とも達成できたとは言い難い。

最後の場面では象徴的な屋敷ハワーズ・エンドにマーガレット、ヘレン、ヘンリー、そしてヘレンの子供が暮らしており、対立する世界が和解、融合しているかのような印象を与える。前述したようにヘレンとバストの関係は信じ難いものであり、ヘレンが私生児を生むということは社会道徳的にも非難されるものである為⁹、出版社の E. Arnold が削除を求めた程である¹⁰。それでも削除を拒絶したフォスターの意図は容易に推測できる。オニトンでの騒動のあと 8 ヶ月間消息不明となったヘレンを心配してマーガレットは本の整理という口実を設け、ハワーズ・エンドに呼び寄せる。時を同じくしてヘレンとの関係を謝罪する為ハワーズ・エンドを訪れたバストをチャールズが軍刀で打ち据え、心臓発作で死なせてしまう。息子の投獄で心痛のあまり変わり果て、助けを求めるヘンリーの姿を見てマーガレットは決心を翻し、ハワーズ・エンドでヘンリーの世話をすることになる。対立していたヘレンとヘンリーは次第に和解をしていき、ヘレンはハワーズ・エンドで出産し、その子がマーガレットのあとのハワーズ・エンドの相続人に指名される。このようにハワーズ・エンドに全ての人が集まり和解していく為にはヘレンとバストとの一件が必要不可欠なものであることは明らかであるし、そこには多様な要素を結びつけようとするフォスターの意思が明確に示されているのである。

また、和解と融合の地ハワーズ・エンド邸は都会にではなく田園に存在しなくてはならないのだが、そこは全てのものを結びつける場所であると、次のように語られている。

The country which we visit at weekends was really a home to it, and the graver side of life, the death, the partings, the yearning for love, have their deepest expression in the heart of the fields....In these English farms, if anywhere, one might see life steadily and see it whole, group in one vision its transitoriness and its eternal youth, connect—connect without bitterness until all men are brothers. (p. 267)

田園は異なる価値観，相反する世界，そうしたものの全てを包み込み，融合しひとつに結び合わせる場所というのである。従ってハワーズ・エンドはイングランドそのものであり，保持していかなくてはならないとフォスターが考えているものを象徴している。チャールズ，ティビーなどの都会人が患っている「干し草熱」にかかることもなく無邪気に干し草のなかで遊ぶヘレンとバストの子供がハワーズ・エンドの相続人であるのなら，そしてハワーズ・エンドがイングランドのあるべき姿を象徴するのなら，イングランドの伝統は田園にあるということになる。さらにヘレンとバストの子供が引き継ぐということで，階級のない社会の到来が予告され，そこには未来への希望が託されていると解釈できる。マーガレットの自動車に対する嫌悪にもみられるのだが，機械文明を象徴する都市生活はうわべだけのもので享楽を与える以外に何も意味がないものだと，フォスターの作品でこれほど都市に対する嫌悪を表明している作品は他にない¹¹。マーガレットもヘレンも，大都会がハワーズ・エンドに忍び寄り田園生活が危険にさらされていることを認めている。

“There are moments when I feel Howards End peculiarly our own.”

“All the same, London’s creeping.”

She pointed over the meadow-over eight or nine meadows, but at the end of them was a red rust.

“You see that in Surrey and even Hampshire now,” she continued. “I can see it from the Purbeck Downs. And London is only part of something else, I’m afraid. Life’s going to be melted down, all over the world.”

Margaret knew that her sister spoke truly. Howards End, Oniton, the Purbeck Downs, the Oderberge, were all survivals, and the melting-pot was being prepared for them. Logically, they had no right to be alive. One’s hope was in the weakness of logic. (p. 340) (下線部は筆者)

明るい未来を希求しながらも同時に、「ハワーズ・エンド，オニトンなどを融かそうとるつぼが待ち構えている。論理的には生きながらえる権利はない

のだ」と、田園の消滅の兆しも認識している。対立する世界の融合にしても、最後の場面の和解はウイルコックス的世界とシュルーゲル的世界が融合したというよりは寧ろ、ヘンリーが没落したことによる和解であり、それよりもシュルーゲル姉妹の反駁、和解のほうの印象が強く、それはシュルーゲル的世界の勝利を意味している。

フォスターの小説では登場人物が最終的にどのような人間関係を持つかによって作品が孕む問題が解決されたかが示されてきた。この作品においても対立する二つの世界を結びつけようとする強い意志が働いていることは否定できないのだが、作品の結末で問題の解決方法が明示されているのか、つまり異なる世界の connection が十分に達成できているのかといえ、その結末には不安定さが残っている。フォスターは、現代の小説家は「結婚」で小説を終わらせるべきではなく「別離」で終わらせるべきだと主張し¹²、また *Aspects of the Novel* では「小説家が固守しなければならない概念は完成 (completion) ではなく拡大 (expansion) であり、締めくくる (rounding off) のではなく外に拡げること (opening out) である」¹³とし、伝統的な小説の「閉じた結末」ではなく「開かれた結末」にしなくてはならないという考えを表明している。だがこうした「開かれた結末」には曖昧さや不安定さが付きまとうのだが、*Howards End* に於いては不安定さが顕著である。ヘンリーとの結婚に象徴されているように、マーガレットは現実の様々な人間のありようを画一化せず、そのあらゆる相違を認め、多様な価値観を受容しようと努力するのである。「外の世界」に対する虹の掛け橋の試みにしてもマーガレットの現状把握が劣るものではなく、度々困難さを認識しており、それでも希望を捨てることはない。しかしながら最終的にはマーガレットの試みは挫折する。マーガレットは「散文と情熱」を結びあわせようとした。それは半分は聖者、半分は獣の不完全な断片である人間同士に「愛」という虹の掛け橋をかけることなのだが、「愛と真実、その闘いは永遠に続くように思われる」とマーガレットは語り、対立するものは永遠に闘いを続け、決してひとつに融合することはないと結論を下している。そして残るのは「恐怖と空虚」なのである。

こうした融合の困難さは作品の基調となって実はヘレンにも語られている。

ヘレンは冒頭でウイルコックス家の背後に「恐怖と空虚」を直感するのだが、第5章のコンサートの場面で、ベートーベンの交響曲第五番の演奏に関連して同様なことが示されている。

...as the music started with a goblin walking quietly over the universe, from end to end. Others followed him. They were not aggressive creatures; it was that made them so terrible to Helen. They merely observed in passing that there was no such thing as splendour or heroism in the world.... Helen could not contradict them, for, once at all events, she had felt the same, and had seen the reliable walls of youth collapse. Panic and emptiness! Panic and emptiness! The goblins were right.... Beethoven chose to make all right in the end.... He brought back the gusts of splendour, the heroism, the youth, the magnificence of life and of death, and, amid vast roarings of a superhuman joy, he led his Fifth Symphony to its conclusion. But the goblins were there. They could return. He had said so bravely, and that is why one can trust Beethoven when he says other things. (pp.30-32)

第三楽章の冒頭に登場する小鬼 (goblin) は栄光とヒロイズムの世界を否定し、「恐怖と空虚」だけがあとに残る。そして第四楽章では再び栄光が訪れ文明の城壁が構築されるが、小鬼は確かに存在し、いつまた戻ってくるかわからない。これはヘレンの未来を啓示するものであり、ヘレンはこの瞬間に人生を見だし、フォスターが言うところの「永遠の瞬間」となる。つまり、人間が創りあげた偉大で完全な作品のなかでさえも、「崇高さと高貴さ」と「恐怖と空虚」は常に姿を消すことなく存在するということであり、それは小説の登場人物を待ち受ける恐ろしい運命であるだけでなく現代の運命、現代文明のジレンマでもある。

このように作品の「不安定さ」は人間関係の結合の困難さ、そこにある希望と否定、こうしたフォスターの安易な妥協をしない姿勢を示すものであって弱点とは言えない。フォスターは *The Paris Review* のインタビューで「*Howards End* には対立があった。真実と愛が私の対立だ」と答え¹⁴、また

Encounter 誌でのインタビューで、自らが当時‘a moment of negation’であったと認め、‘The possibility of human communication is very small.’と述べているように、この作品執筆当时には人間同士の相互理解に疑問を抱いていたことが窺える。「開かれた結末」は happy ending ではなく beginning であるのだが、この作品では決して明るいものではなく悲劇的な様相を濃くしており、理解しあおうとする人間の努力、格闘の無意味さを超えて絶望感さえ感じられる。エドワード朝は自然と深く結びついた文明が過ぎ去っていく時代であり、古いものを破壊して新しいものを求める時代で、そして新しいものの実体がまだ定まらない、多様な価値観が錯綜する時代でもあった。この作品においてフォスターは人間を孤立させている障害を取り除き、対立する価値観を受容し相互理解をしようと試みるのであるが、エドワード朝の多様な価値観のなかで理解しあうことの困難さ、またその実現がいかに絶望的な時代を迎えているかを示している¹⁵。そして問題が未解決で緊張関係を保ったままの現実に於いて、フォスターは積極的に判断を下そうとはせず寡黙になってしまう。二つの世界を結びつけようとしたマーガレットは作品の冒頭では饒舌であるが、次第に落胆していき最後の場面では口数も少なくなり沈黙することが多くなっている。この沈黙は同時に作者フォスターの沈黙でもあり、それは次作の *A Passage to India* まで14年間も続く長い沈黙となり¹⁶、やがて *A Passage to India* のムア夫人 (Mrs. Moore) の異質な「沈黙」へと変容していくのである。

Notes

1. *Howards End* について次のような書評がある。

Unsigned review, *The Times Literary Supplement* no.459,27 October 1910, 412

Mr. E.M.Forster has now done what critical admirers of his foregoing novels have confidently looked for—he has written a book in which his highly original talent has found full and ripe expression.

Unsigned review, *Daily telegraph* 2 November 1910, 14

There is no doubt about it whatever. Mr. E.M.Forster is one of the great novelists. His stories are not about life. They are life. His plots are absorbing because his characters are real; he does not create them, but observes them.

Unsigned review, *Spectator* cv, no.4297 November 1910, 757

There is no novelist living on whom one can more confidently rely for unexpected developments than Mr. Forster. Surprise, whether consciously or unconsciously administered, is of the essence of his method.

R. A. Scott-James, 'The year's best Novel', *Daily News* 7 November 1910, 4

'Only connect. . .' is Mr. Forster's motto. It is because he has taken this motto not only for his book but also for his method of work that he has achieved the most significant novel of the year.

'A fine novel', *Daily Graphic* 19 November 1910, 4

Howards End is a novel of high talent—the highest. That is praise which the reviewer reserves, or ought to reserve, for the work of an author whose future seems to him as certain as his present or his past.

Unsigned review, *Athenaeum* ii, no.4336, 3 December 1910, 696

This novel, taken with its three predecessors, assures its author a place amongst the handful of living writers who count. It is the story of a conflict between points of view.

Unsigned review, *World* 20 December 1910, 943

There is no doubt that this novel has been one of the sensations of the autumn season,...

unsigned review, *Morning Post* 24 November 1910, 16

His previous books have shown what the schoolmaster calls 'steady progress', and *Howards End* is undoubtedly the best piece of work he has yet produced, and ranks as one of the really significant features of the present publishing season.

アーノルド・ベネットも「これほどエリートの間で論議された小説は近來ない」と語っている。Arnold Bennet, *The New Age* 12 January, 1911, in Arnold Bennet's *Books and Persons* (New York: Greenwood Press, 1968), p.292.

2. E.M. Forster, *Howards End* (London: Edward Arnold, 1910), p.343

本文中の *Howards End* からの引用は全てこの版により、頁数を記す。

3. David Shusterman は次のように指摘する。

David Shusterman, *The Quest for Certitude in E.M.Forster's Fiction* (Bloomington: Indiana University Press, 1965), p.156

Even Trilling, who believes *Howards End* to be Forster's masterpiece, has misgivings about the ending: "It is not entirely a happy picture on which Forster concludes, this rather contrived scene of busyness and contentment in the hayfield; the male is too thoroughly gelded, and of the two women, Helen confuses that she cannot love a man, Margaret that she cannot love a child. And the rust of London, with its grim promise of modern life 'melted down, all over the world', creeps toward *Howards End*."

4. Alistair M. Duckworth, *Howards End: E.M.Forster's House of Fiction* (New York: Twayne Publishers, 1992), p.14

Several reviewers found the ending unsatisfactory, or were troubled by the im—probability of Helen's sexual encounter with Leonard Bast, or by the contrived management of Leonard's

death.

5. Barbara Rosecrance, *Howards End*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p.109

6. リーヴィスはマーガレットとヘンリーの性格から考えて二人の結婚は信じ難いと述べている。

F.R. Leavis, "E.M.Forster", in *Forster; A Collection of Critical Essay*, pp.40-41.cf.Page, p.90.
またシャスターマンは次のように指摘する。

Shusterman, *The Quest for Certitude in E.M. Forster's Fiction*, p.147.

It comes, perhaps, as something of a shock to some readers that Henry Wilcox and Margaret Schlegel are ever brought together in marriage. Many readers, including not a few literary critics, have expressed amazement that Forster could have decided that this marriage would be possible.

7. John Sayre Martin, "E.M.Forster" *The endless journey* (Cambridge: Cambridge University Press, 1977), p.117.

If Forster were Charles Dickens, Leonard Bast would doubtless be a convincing character and *Howards End* a more satisfactory novel. But like Henry Wilcox, Leonard is one of the novel's failures, for Forster had no firsthand knowledge of what it feels like to be poor and ambitious. He does not, for he cannot, give one the sense of a direct encounter with Leonard's mind, but instead comments ironically upon its workings, as in the well-known scene in which Leonard is reading Ruskin.

8. お互いの感情のなかに性的なものが示されていない, あるいはエドワード朝の上層中間階級の若い女性が下層階級のバストとの関係を持つことは疑問であると指摘されている。

Oliver Stallybrass, "Introduction," in *Howards End* (The Abinger Edition 4; London: Edward Arnold, 1973), pp.xiii-xiv; Cavaliero, p.117.

Rose Macaulay, *The Writings of E.M.Forster* (London: Hogarth Press, 1938), pp.113-114

Christopher Gillie, *A Preface to Forster* (New York: Longman, 1983), p.126.

9. Norman Page, *Macmillan Modern Novelist: E.M. Forster* (London: The Macmillan Press, 1987), p.77.

One criticism that had been made, however, concerned the handling of Helen's relationship with Leonard Bast. Forster himself had not been satisfied with this episode, and for different reasons, moral rather than artistic, his mother had been 'deeply shocked'. As we shall see later, reviewers also found fault with it, and for many readers it remains a blemish—moreover, as I shall suggest, a blemish of a rather characteristic kind.

またフォスターの母親もヘレンとバストの関係の描写にショックを受けたと言われている。

Even in Forster's world, describing the pregnancy of a *respectable* woman had its perils. In the 19 September 1910 entry in his so-called locked journal, Forster wrote: "Mother is evidently

deeply shocked by *Howards End*. The shocking part is also inartistic, and so I cannot comfort myself by a superior standpoint.... Yet I have never written anything less erotic” (King’s College Archives).

10. Arthur Martland, *E.M. Forster: Passion and Prose* (Swaffham: The Gay Men’s Press, 1999), p. 119.

Oliver Stallybrass suggests that prior to publication the publishers, Edward Arnold, made attempts to have the incident of Helen Schlegel’s sexual encounter with Leonard Bast cut from the novel (HE, xiii). Forster resisted this and a suggestion that he shorten his work, and the final version of the novel was published on 18 October 1910 (HE, xv).

11. BBC のインタビューに答えてフォスターは都市が田園に及ぼす影響を懸念している。

Long before the BBC asked him to consider ‘The Challenge of Our Time’, Forster had been gloomy about the city’s challenge to the countryside. When he talked to the Working Men’s College in 1907 on ‘Pessimism in Literature’ he asked his audience to ‘consider Box Hill’, which had become an amusement centre but still escaped being swallowed by the city. What was its fate in the future? London will have absorbed it. Houses will be nondescript. Motor cars will pollute the roads and aircraft will scream overhead. The inhabitants will care more for manufactured consumer goods than for the fruits of the fields.

またフォスターは *English Prose between 1918 and 1939* で以下のように語っている。

It has meant the destruction of feudalism and relationship based on the land, it has meant the transference of power from the aristocrat to the bureaucrat and the manager and technician. Perhaps it will mean democracy, but it has not mean it yet, and personally I hate it.

David Shusterman, *The Quest for Certitude in E.M. Forster’s Fiction*, p.146.

Along with this desire for permanence rooted in tradition and the feeling of dismay at the onrush of mechanical civilization goes a feeling of disgust for, or even hatred of, city life. In no other Forster’s novels do we see this antipathy to the city shown so openly by the author. The city has little to offer us, he feels, except a spurious kind of excitement.

12. E.M. Forster, “Pessimism in Literature”, in *Albergo Empedocle and Other Writings*, ed. George H. Thomson (New York: Liveright, 1971), pp.135–136.
13. E.M. Forster, *Aspects of the Novel* (London: Edward Arnold, 1927), p.216.
14. Malcolm Cowley (ed.), *Writers at Work* (London: Mercury Books, 1958), p.27.
15. David Shusterman, *The Quest for Certitude in E.M. Forster’s Fiction*, p.157.

But—in the light of many subsequent statements made by him—it seems possible, even probable, that by the time he had finished *Howards End*, he was convinced that perfection could never be reached in this life of imperfect, fallible human beings. In order, therefore, to see life as a whole, one must accept things which formerly one was tempted to reject and anathematize. It seems to me that *Howards End* itself, with its expression of the philosophy of adjustment, is evidence enough that Forster had arrived at this point of view.

16. フォスターの沈黙の原因は31歳の若さで売れっ子の作家になったプレッシャーもある

と指摘するものもあるが、ムア夫人の沈黙はこの当時の沈黙とは異質なものに変容していく。

Two years after the latter came *Howards End*. Its reception was, as Philip Gardner has said, a 'solid vote of confidence in Forster's talents': though only thirty-one, he found himself now an established novelist with his reputation 'consolidated and given clearer definition than before.' ...The effect on Forster, however, was to unsettle and disturb him: he disliked popularity, felt curiously guilty and superstitious about his success, and began to fear that his creative talents would dry up. This last was a fear that was to haunt him, not without reason, for many years.